

平成23年度 内村川上内科部門 実践研究発表

転倒・転落事故低減への取り組み

平成23年11月24日

外来病棟看護部
赤崎愛 福村奈津紀

転倒スコアシート

病棟		患者氏名		科	歳	男・女	入院日	翌日				
項目			／	／	／	／	／	／	／	／	／	／
年齢	70歳以上	1										
既往歴	評価日より一ヶ月以内に転倒・転落をした	1										
感覚	眼鏡やコンタクトレンズを使用しないと日常生活に支障がある	1										
	大きな声を出さないと聞き取りにくい	1										
機能障害	麻痺がある	1										
	しびれがある	1										
	骨、関節に変形・痛みがある	1										
活動	足、腰の弱りがある	1										
	 立位、歩行時にふらつく	1										
	歩行、移動時、車椅子、杖、歩行器を使用する	1										
	車椅子、ポータブルトイレに移動時に介助を必要とする	1										
	ルート類・各種ドレーン類が挿入されている	1										
認知力	認知力の低下がある	1										
	必要時ナースコールを押せない（押さない）	1										
	一度話した内容を忘れてしまう	1										
混乱	不穏行動・せん妄がある	1										
薬剤	 鎮痛剤を使用している	1										
	麻薬を使用している	1										
	睡眠安定剤を使用している	1										
	向精神病薬を使用している	1										
	抗パーキンソン剤を使用している	1										
	降圧利尿剤を使用している	1										
排泄	 尿便失禁がある	1										
	夜間3回以上トイレに行く	1										
	尿器、ポータブルトイレを使用している ベッドサイドで排泄をしている	1										
生活	一人暮らし等、他者に依存しないで生活している	1										
その他	転びそうだなあ〜と思う看護師（私）の勘	1										
	合計											
	危険度											
	サイン											

危険度Ⅰ

スコア0～7点

転倒・転落を起こす危険がある

危険度Ⅱ

スコア8～11点

転倒・転落を起こしやすい

危険度Ⅲ

スコア12点以上

転倒・転落を起こす危険性がかなり高い

入院後、転倒・転落あり

具体的な対策方法

◆ 離床検知装置 (転倒むし)



◆ 低床マット



◆ 壁寄せ2点柵



具体的な取り組み事例①

K氏 女性 82歳
転倒スコア 危険度Ⅲ 15点

心不全治療にて入院。認知症あり。下肢の浮腫あり、歩行不安定だが、徘徊あり。入院当日の夜間に転倒する。



壁寄せ2点柵と離床検知装置使用するが、検知装置を自力で外し、ベッド柵を乗り越えて徘徊するため、壁寄せ1点柵へ変更。

具体的な取り組み事例②

Y氏 女性 84歳
転倒スコア 危険度Ⅲ 14点

肺炎治療にて入院。認知症あり。施設入所中に転倒の既往あり、畳部屋にて生活中。



低床マットにて対応する。体動が激しいため周囲の環境整備を行い危険防止に努める。

具体的な取り組み事例③

S氏 女性 88歳
転倒スコア 危険度Ⅲ 12点

呼吸不全にて入院中。入院中も数回の転倒歴あり。ナースコールの使用が難しく、頻回に起き上がり、徘徊する。



離床検知装置使用するが、装置が気になり自己抜去することが多く、低床ベッドと壁寄せ2点柵併用し対応する。

結果

- ◆ 活動開始前後の転倒転落率を比較すると、発生率が減少していた。しかし、入院患者の状態は日々変化していくため対策による発生率の減少とはいちがいにはいえない。
- ◆ 対策を開始してから、転倒転落を起こした患者はすべて転倒スコアが危険度Ⅲであった。
- ◆ 対策を行っていても、個々に合った対策方法でなければ転倒を起こしてしまう。
- ◆ 対策用具を正しく使用できなければ転倒転落を防げないこともある。

まとめ

- ◆ 転倒を防止する必要があるが、それにより身体拘束となる場合もあるため、患者の入院前の環境や現在の状態に考慮し、対策を行っていく必要がある。
- ◆ 対策用具を正しく使用できなければ防止できない。
- ◆ チーム内だけの情報共有ではなく、スタッフ全員で情報を共有していく必要がある。
- ◆ 転倒スコアシートを活用し、ハイリスク患者の抽出を行っていく。